

語り継ぎたい

昔ばなしの

お子さんや
お孫さんへの
読み聞かせにも!



最後に本を読んだのは、いつですか？

「忙しいのに読書なんて…」と思うかたもいるかもしれませんが、

しかし、本から日常のヒントを得たり、刺激を受けたりすることは多いもの。

「読む習慣」は、あなたの心や、人生をも豊かにしてくれるはずですよ。

今回は、この町にまつわる昔ばなしを、3話用意してみました。

最近、活字を読んでいないかたにも親しみやすい、短いおはなしです。

秋の夜長、久々に物語を読んで、ホッと一息ついてみませんか。

金田屋敷のおはなし

これはまだ福岡県が「筑前国」「豊前国」「筑後国」という

3つの国にわかれていたころのおはなしです。

ある年の夏、大地を揺るほどの豪雨が金田村を襲いました。

「こりゃあものすごい雨じゃが。なんもなからなイイばってん…」

金田村宮床の川岸近くで暮らす2軒の村人の心配をよそに、

雨は毎日降り続け、ついに彦山川が大氾濫してしまいました。

濁流は一瞬のうちに2軒の家を襲い、家の中の人たちもろとも、

あっという間に押し流してしまつたのです。

家の人たちはなすすべも無く、屋根裏の梁にしがみつぎ、
おびえながら無事を祈るしかありませんでした。

「暴れ川」で有名だった彦山川。

当時は流れをせき止める井堰や橋などの障害物もなく、

2軒の家は、大破することなく川下へ流されていきました。

「ここはどこやろか…」

ようやく流れ着いた場所は、現在の直方市中泉付近。

2軒の家は、金田村や草場村のある豊前国の国境を越えて、

中泉村のある筑前国まで流されていたのです。



宮床(彦山川・中元寺川合流点付近)から家が流されたとされる現在の福智町と直方市の境。「金田屋敷」と呼ばれているのは川の西側で、東側には「国境石」があります。

当時の農民の間では、国を越えて移住するということは、
考えられないことでしたが、大水害に遭いながらも生きのびた
2軒の家の人たちを、筑前国の人たちは「人間業を超えた天の所業」として咎めず、
金田村の彼らが筑前国にとどまることを、黙認することにしました。

この2軒の家は、金田村からの飛び地にしては離れ過ぎていたため、

国境に一番近い「豊前国草場村」の「国境を越えた飛び地」として落ち着きました。

その後、現在の直方市の「金田屋敷」と呼ばれる地域になったということです。



宮床(彦山川・中元寺川合流点付近)から家が流されたとされる現在の福智町と直方市の境。「金田屋敷」と呼ばれているのは川の西側で、東側には「国境石」があります。